





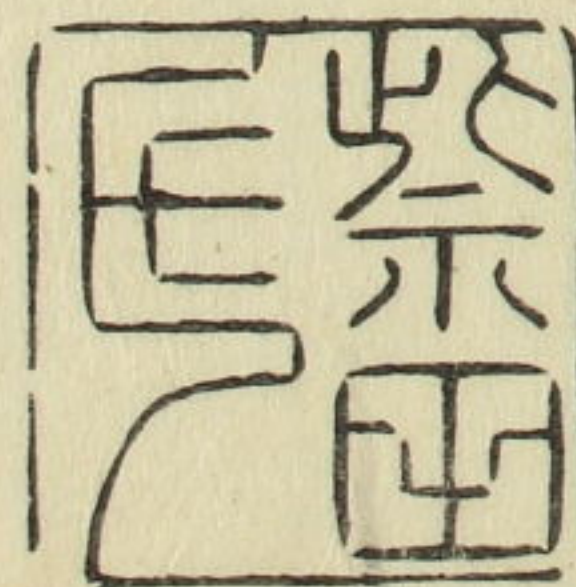
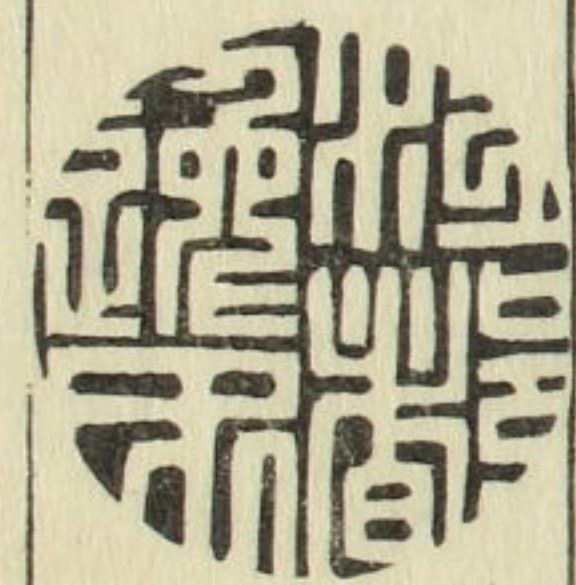
俳諧無門關序  
柏樹子之話有賊機袒翁  
之唵有古池青山流烏綠  
水聳烏砂石輝天星辰敷  
地烏江上清風山間明月  
嗚呼禪也俳也是我師所  
以有無門關之作矣或問





曰子胡亂指註臂膊向外  
不曲子說禪乎說俳乎曰  
棒下無忍生爾固有酒債  
六謾休指佛前之錢五山  
臺上雲蒸飯古佛堂前大  
尿天尚未會為爾不惜眉  
毛親舉一句曰日面佛月  
面佛且道是禪歟俳歟看

看雪如鳥如鳥如鳥如鳥  
吐寶曆壬午孟冬白潛居  
士鼠腹序





俳諧無門關

目錄

水乃音

辛峠の臍

猫を恋

駕の雛

大歳の冠

岩端の客

氷有氷無

冬れ月

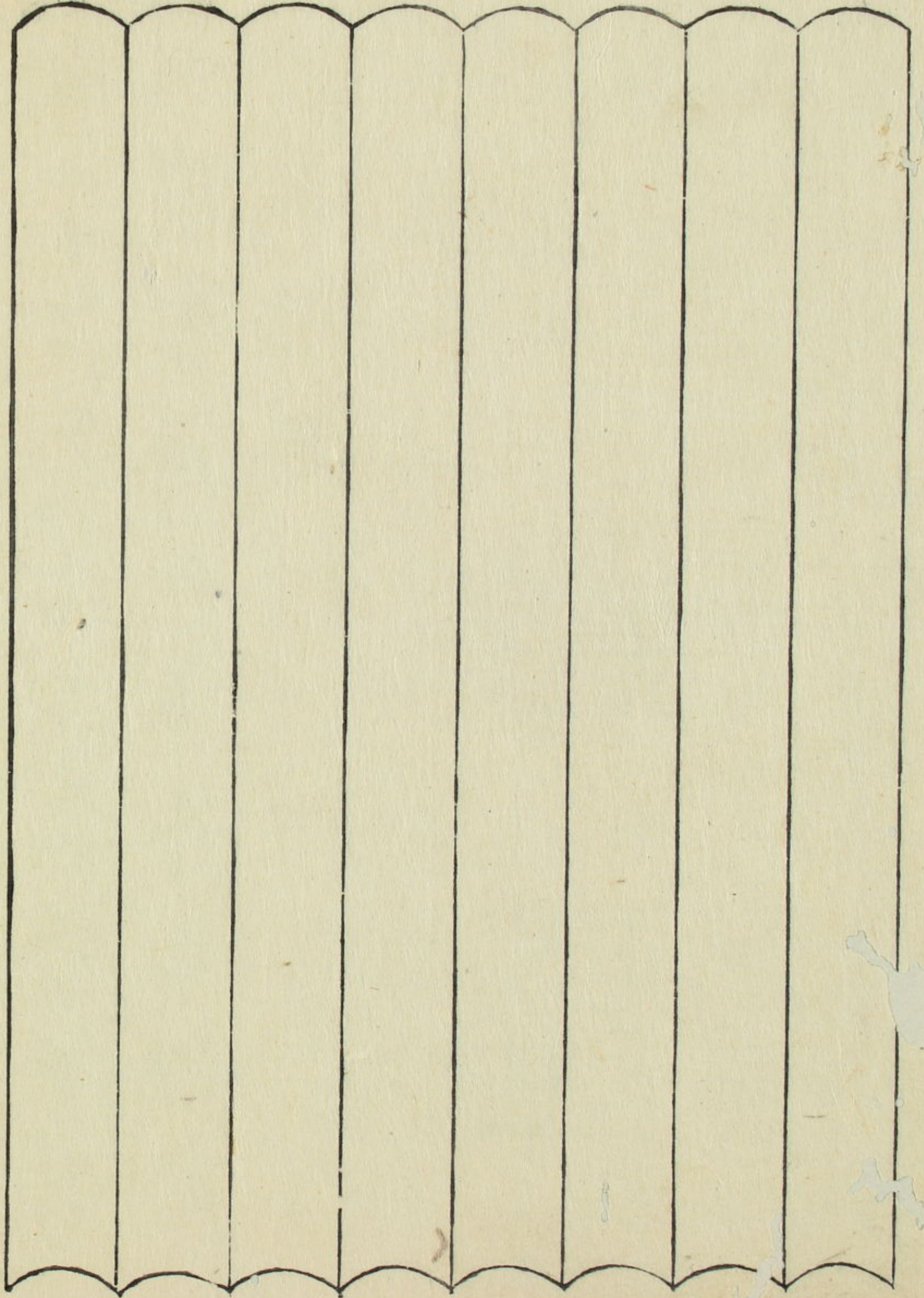
本から

萌黄の牧屋

病雁の格

下京れ客

無門關



世月二



涼比痴氣

不易流行

俳諧工夫

機と見ると

交考一句

切字の秘

や歌の译

盲より唾

麦留麻留

西國の馬

俳諧如禪

許六句談

去來千卷

兔走蟄

難波の病床

風色相款

切字又卷

向上一路

白体言悪

或時の教

附合の響

摺小本の蝇

真草皮肉

修行の地

昨日の我

涼一さ夕

恋の取捨

馬乃耳

連俳のよる波

鶏頭草

俳諧の二字

揚句の译



下臥の揚

酸く甘く

俗談平話

石の松

素秋の節

俳諧三鳥

以上四十八則

俳諧無門關

愚得坊鼠腹評  
雪中庵蓼太頌

水の音

右いけや蛙起こむあはき へせ飯

其角翁に向て曰山吹やれ又文字を並て莊嚴せといふ  
翁曰汝もとてハ可く余もわかやハ不可くと宣ふ

譯曰学者角の風調を得んをわたり山吹ふ春也  
翁の風調をゆんをわたり古池をよせく是と云れ



祖翁佛頂和尙の禪を承得て領悟の旨乃一白也  
今天下の佛と云ふものばあたらざるものもかくば白飯  
を食ふものもあらず一化佛道の発る所合後解をいふは  
理解すべしす法を承て師を承し言に承てを乃例す  
領悟の日より一たゞ祖翁の舎下にて何をいふはあて  
承得るにあらざらん、辛白と云ふ妙句と云ふは日々に  
又百と百も皆是依草附木の精華と只日夜相着  
佛道はくらし居るる眼赤の一切皆佛道なり奉法  
者もせん是是の妙句と云ふ終に領悟の日より一た

或曰白却て妙ならずや又かや曰無又曰能ばはは舎すや  
曰一子親得領長三尺知是誰相對無言獨足立

頌曰

世より他の言をみくらば 桂なく夜の露をくらば  
ひより又ひより美風吹は ありの空よりや山吹

非有非無

蓮二衆示曰佛道有り有らば有り無らば有り  
中乃是別と云ふ人



译曰無<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>凡有<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>す此を此有にあり<sub>二</sub>次  
此<sub>二</sub>を此<sub>一</sub>有<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>次は白と駮而此と段す僅<sub>二</sub>  
有<sub>二</sub>多<sub>一</sub>と<sub>二</sub>ら<sub>一</sub>ハ十<sub>二</sub>万<sub>一</sub>八<sub>二</sub>千<sub>一</sub>

頌曰

柳のみを花にまな井 砂子と砂と丸い月夜  
人笑はせく我も笑ふて 心の通ふ奈に茶深しき

辛崎の臈

辛崎れ妻と花より臈より 七世致

伏人の作者もて苗の難り其角曰もて<sub>二</sub>哉<sub>一</sub>か<sub>二</sub>ふ<sub>一</sub>け<sub>二</sub>を<sub>一</sub>に  
か苗の養白に<sub>二</sub>も<sub>一</sub>て苗のま<sub>二</sub>を<sub>一</sub>と<sub>二</sub>始<sub>一</sub>ふ<sub>二</sub>式<sub>一</sub>と<sub>二</sub>して<sub>一</sub>白切迫<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>れ<sub>二</sub>  
して<sub>二</sub>其<sub>一</sub>ゆ<sub>二</sub>る<sub>一</sub>或曰もて<sub>二</sub>苗<sub>一</sub>其<sub>二</sub>角<sub>一</sub>解<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>又<sub>二</sub>も<sub>一</sub>て<sub>二</sub>苗<sub>一</sub>の<sub>二</sub>白<sub>一</sub>  
い<sub>二</sub>く<sub>一</sub>養<sub>二</sub>白<sub>一</sub>と<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>や<sub>二</sub>紗<sub>一</sub>あ<sub>二</sub>や<sub>一</sub>去<sub>二</sub>来<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>是<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>脚<sub>一</sub>真<sub>二</sub>感<sub>一</sub>偶<sub>二</sub>と<sub>一</sub>養<sub>二</sub>白<sub>一</sub>は<sub>二</sub>事<sub>一</sub>  
疑<sub>二</sub>り<sub>一</sub>才<sub>二</sub>之<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>白<sub>一</sub>素<sub>二</sub>に<sub>一</sub>と<sub>二</sub>り<sub>一</sub>養<sub>二</sub>白<sub>一</sub>素<sub>二</sub>と<sub>一</sub>と<sub>二</sub>ら<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>才<sub>一</sub>二<sub>二</sub>も<sub>一</sub>に<sub>二</sub>  
く<sub>一</sub>く<sub>一</sub>翁曰も<sub>二</sub>去<sub>一</sub>り<sub>二</sub>辯<sub>一</sub>告<sub>二</sub>理<sub>一</sub>屈<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>我<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>只<sub>二</sub>花<sub>一</sub>より<sub>二</sub>松<sub>一</sub>の  
臈<sub>二</sub>と<sub>一</sub>西<sub>二</sub>白<sub>一</sub>り<sub>二</sub>中<sub>一</sub>り<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>こ<sub>二</sub>か<sub>一</sub>なり

译曰角<sub>二</sub>ハ<sub>一</sub>も<sub>二</sub>て<sub>一</sub>苗<sub>二</sub>の<sub>一</sub>法<sub>二</sub>と<sub>一</sub>後<sub>二</sub>来<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>養<sub>一</sub>白<sub>二</sub>才<sub>一</sub>之<sub>二</sub>の<sub>一</sub>為<sub>二</sub>別<sub>一</sub>と<sub>二</sub>後<sub>一</sub>社<sub>二</sub>翁<sub>一</sub>  
何<sub>二</sub>り<sub>一</sub>て<sub>二</sub>理<sub>一</sub>屈<sub>二</sub>と<sub>一</sub>ハ<sub>二</sub>才<sub>一</sub>ひ<sub>二</sub>り<sub>一</sub>く<sub>二</sub>や<sub>一</sub>く<sub>二</sub>祖<sub>一</sub>翁<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>心<sub>二</sub>と<sub>一</sub>



徹ちんとわくはいらと涌きつりねと三千巻八百

頌曰

松理念の枝はまけきも 云葉のたを建ふんころ  
杖とまよの翁おひんむ じう一ねがう北山を四の

冬の月

は木戸や鏡乃とくしとそ月 其南

後善選の内はらとまきとり下と冬の月霜は月と雲はひらり  
うすゆね初は木戸文字はまりて葉の戸と懐より霜曰

角う冬霜と並がふ(ま)うもほらぬと冬は月と雲はひらり  
そは木津より霜のよと葉は戸をあけは木戸のわら  
秀乃造ハ一向も木切あしと登出板とふふらといき改へて  
凡此日葉の戸は木戸とせり務劣なり去来日日月と雲はひらり  
あてたれはあつたの凡此と雲と城門とけりてははるた  
そ風情あつたれと雲のまきくふとくをせり角冬あつ  
並がひけるもあつたなり

孫曰葉は戸何し尋常なるや城門何しとあまらる  
去下に凡徹たは徹の凡安とおひ師と懐らまらるあつ



頌曰

雲いと白く城は木隠く 奴こそ心も日の影  
春白く其角詩と李妻甚 句のいひと酒こそくめ

猫乃恋

羨しおりのいさりの付猫のこい 然人

評云曰翁伊賀よりけりまきまきと曰公之風雅なるもの一度只に  
出でその事あり彼風流けりたててなれを歌きりこきよりなれ  
然人なれば方こそく人のうきとやす春白多し然たまに迎く

始くおれと歌守とんまひり

評曰漢く継浩の後と告す一たひけ地位とやん人を  
祖翁法師と膝と紐とんぬいと語り

頌曰

月ハ腰に巻ふかくまは 花は女をまの水と教く  
羞かく所を探のま 子川をたてて世に叙す人

本加良之

本からし二月廿月の晴らる 春今



本から一の地も落さぬまの如 去来

三本曰二日お月とれ吹ちると働くはなりやうと遠く諸より  
おり由前曰分りやう二日の月とよまのまに他よりそよ自然  
除くよるるのめ一汝う何とぬと他一きりうと及ん金花の  
好句と唯他とと障りたるの字や一まを一まを(丑初と  
地まておとさぬあり

译曰海とせ人よき(まらまの)一人のう海と誰か  
祖海はよるぬと心肝と吐露す唯人の信不及

頌曰

檀木堂の風竹声 茂栴舎とそ響ちりい

はらぬとまの月のま 猿蓑の袖とれまされ

駕の雛

春風のあつきを雛乃加の元

雛はるは译して曰译賀の他者仇なるを他一とむ  
懐しとなり文章曰伊賀のたかり前ハまらまを雛めれ  
そ仇なるハ前のおいかりに中

译曰前につくふちあるまをと大文章は神とくはまを



頌曰

雛の初志桃の楳に 結ふ胡葱とて女と事  
理愈よ世の夢いふより 子依とらふ翁中一也

萌莢の牧屋

春う春改屋を萌莢と梅りぬ 然人

翁此を言はば日桑白ハからけられ美の白とて守紙今句  
既と翁言ふりて人心中又おきこ出来より月影影胡かと  
至く草の白と草人へてまをからぬとを思ふは引りて

草目とて作りぬをく白辛葉をらぬ汝り句と既ハ  
翁言ふておわくハ心の中をくは座と居るをくすく

译曰機輪轉處達者猶迷四維上下南北東西

頌曰

利休の茶一抽味嗜の和食 園別当の糶の庵下  
囀乃月夜と囀れ和心と あうね流れ砂川の水

大茶の冠

お下く一紙おきんハうのかた記か 九兆



之也の又文字をてふと重くまう句を去来曰はるる季なり  
 信徳曰てふとらと重く一はた強人の思ふ事ゆかりを去来曰物な  
 お意有りて人を重くして内親と信義然情を人とするらみ  
 山師と慈ひ信をいす身余のゆゆ及後福と重く却て  
 年の融氷とてふも海乃てかめ人信徳程に重く重く  
 信に信曰とてふら信りある事ありて之は九代大業と冠す  
 弟曰てふ一日千軍の敵といふも重く重く大業と冠す  
 譯曰九代信ハ已を知りて後二人を譯す一は信りて  
 九代と信りて曰名將也下は弱兵なり

頌曰

意をてふ意はくら 年ハハ志子取う  
 分別の遅ハ別 年波とゆら一は

病雁の格

病雁は秋をとりて旅床ハ 七世  
 養の家ハ小雛ハ仲ハるいそり如 全

猿蓑撰の附はる入集也一と云九代曰病雁ハさるる季なり  
 小師をてふといふはるのち日事ありて誠と秀逸と云



去来曰小瓶の白ハ杯一と云まもまの致業一得ら付た  
平う口も出ん病房ハ格うく致業一していつてうま致業一  
はちんと痛一終一高うまうとて入集そま位前曰病房と  
小瓶おと一とく一痛一たりと笑ひ給ひたり

译曰試之去来二向十字街頭親爺あつてや

頌曰

房 貴 田 いちくなく家  
見すやふこ 乍和りき戸

岩端の客

出端やちうとひり月此客 去来

前上洛の阿去来曰酒堂ハ白と月の様とト付まと付ハ  
客傍にうりとヤめヤ行ゆるや前曰様ハ何事と汝は白以  
いつと思ひて他もや去来曰名月と云して山即吟堂ハ白を  
去来曰又一人の強客と云はけるとヤ前曰及も獨月の客と  
云はまると去来出んや幾らくの風流なしく自持ハ  
白と云す人ハ白ハ我も孫予して笑の小うま入ぬるとめん  
其曰予、強白物二三等と云はゆるめん前去来云云



忍く及んぬがーハね者の威もあらずや

汗曰玄来由付一炬乃火と乞くむ性を焼くや  
志うもかゝるあましくなりとて子も是江西の石頭

頌曰

強はさす乃ほる客ありき日月

下京の書

下京や君様うへの夜の夜

九北

けり初冠をー冠と始いらくとまかりてけ冠上松きゆふ

九北あど若くいまさあつる冠曰北は柄は冠は  
美ゆふくその何くハ家二度とふいとふ無くハとあり  
玄来曰け又玄来よはるハ世くを去るゆまといかふ  
うはいつくかゆんは事他門の人すゆらハ縁やく歳ツセ  
冠をーもよとと事方冠ハ又去あつたおしりあふ思ひ  
汗曰玄得も三十棒並ゆさるも三十棒いんり来記と通せん

頌曰

妻ら梅く来なり  
御仏名おとまり道  
行旅の使きとて



是ハそら上梅多ひて 白きものつらぬきや  
初の介乃返夜を 言うて止む

源の在氣

夕涼夜氣おろしてかしまり 志来

平々初学の附案白の仕やと伺ひけり 翁曰 翁白ははく  
作言たりと申す 一こ試みけりを候して伺ひぬまは又  
是もくもちと大笑しけり

译曰 痴人面赤夢を候かす 夢中嘯々白日青天

頌曰

吾らうき夢おろし 乃のまじやせり  
不ろくまのまじり 虚空の月ハ丸

麦島麻をけ

清うとあふ子仇のまけや 麦島 志来

元北曰 麦島ハ麻島ト云れん 志来曰 麦麻ニ成テ子蓬ニ成ル  
若ク其後ニ福キ翁曰 又云 麦島ハ丸の福か 一申す 用と  
期一終ふ人々



译曰方々より發する所を要する所と發する所を  
法と本来法不法亦法

頌曰

よーといふも其の意 阿といふも其の意  
いれども其あらー ありけるハ其の意

不易流行

本草曰不易の向と苗附りの体と好くとやらハ是也  
又流行の白とふー

译曰不易といふと定と命とを馬蹄と凡る流行といふ  
箭新最といふと汝不易流行といふと要事也昨夜  
三更月窓前といふ今日雨後清風机上落

頌曰

あーと させるあり 天をまらなく  
いろと 志欲といふ 白子といふあり  
らうハ 夜竹の 一葉やー  
はれと 色く福と やくたらふやー



西國の馬

祢りてはらふあふ乃馬 表松の白

祢去試と馬以を來と乞り。附は白とをきかけり  
翁と何ふと翁曰今ハ多怪ら一たると怪ひはるは  
多怪とせよへくをて上京の時同く曰はるる  
多怪と何れ翁曰丹の中よりこれ好ふ事ハ一  
あふの馬ととハよくあうら一きるものことよし

祢曰白とをき試活るとか一白とをき試活るとか  
祖翁具眼能來様と辨て學者却て祖とあるや

頌曰

世ハ一日のちきひとあふ ちせと本様の念をせん  
只眼のそれ馬と振舞と 及び人も氣とハるる

俳諧工吏

翁曰今のふいふ見と工吏と経て席上をて氣は試  
以て吐へく一ん改とあをへからはとあり  
祢曰く一ん改とあは千里若里奈附り事  
なりきいぞと



頌曰

猶かひも花を散らし  
ふりかんとてまの  
下終後之の廟を  
病とよの待り歸る

俳諧如禪

支考曰むしーのふふと如来禪のこー今の俳諧ハ  
祖師禪のこー納着をいへ則持す

译曰納をいへ則持す納をいへ作麻生かひい  
迦葉破教微笑二祖をいへ之を禪と断る箇を

如来禪を箇々祖師禪をこく二をとりて説す

風風も出るるけき箇の年

誰やらう姿を似たり今朝此妻

頌曰

ほろけと水は月 祖師と八松はあらー  
やけーやと朝の妻 おもーらや雨の年

穢と見て説

翁酒堂と説て日登るハ汝とくニツ之ヲ穢集をらとのこ



あらはれよと申す乃へきりぬくをりぬくことあり

伴曰はや申しあひて白後には葉なり好肉と割く  
瘡と申す事なりんハナリ

頌曰

鏝くも然の言 ぬれ日も香の目も

耳も足て目もきけ 三つらなりあら糸

祚六句後

祚六日奪るハ其命とものこ初日を社社終りの三城ハあらはれ

伴曰東家の人死は西家の人哀とにぞく祚言り  
瘡見とあらは祖翁伴と幸ふなりんハ可く

頌曰

鞠ハらうと云ふと思ハ 鞠ハをまきとやいと云ふ

鞠ハをまきとやいと云ふ 鞠ハ直と云ふと云ふ

交考一句

交考曰所白は一句二一句をり糸白附おとハやくハ  
何とて一連儼と申すハと云場よの人何と云ふの糸はたの



乃人をありて一白と多くハなるものこ

評曰法々を人々人々あらば工法なるものと法々  
しき法祖翁の口授心法ありしうけ地地位ハ  
いきらハ汝一任も一茎草と云く丈六の  
合以之か一得ん事哉

頌曰

夜季や竹田乃和法をさる  
又白をさるふあれはけり

玄来千翁

玄来曰附白ハ一白と千萬之故に俳諧変化極なり

評曰考ハ一白と附白一白と云ハ来ハ千万ありと云  
汝等却て會摩曰不舎曰と云是は同條と云して  
同條と云は死に悟るくハ彼と末後の白と云と云るを  
曰末後の白作摩生いづく同條と云して同條と云は死に

頌曰

夜季や竹田の和法をさる  
月をまららむらむらと云る



切字の秘

外七日癸酉の切字と入るのみはゆき来日あり翁曰  
 汝切字とあるや去来日いふは傳文なり唯自かこを傳  
 傳る翁曰いふ去来日假令ハ癸酉ハ一本本のやいと  
 稍根あり傳ハ枝のこゝ大なりととも全からん稍根  
 ありハ切字の有なきとくハ癸酉の体なり翁曰ふり  
 然とすれば面就汝知らり是と傳文をい一切字のふハ  
 連傳よりと傳く秘を撰て人の讀るにやうすと傳く

翁の取る事おひとくも秘をいとくハ是乃と  
 されは去来ハ物を急しゆり

評曰讀く所謂いとぬハふよまふと伝わり  
 きとく去来懸河の辨とけくも物用不着  
 いらんとせんを叮嚀ハ君り徳と換るなり

頌曰

いらふをとりぬるとわうよたけつねらむかのかく  
 ちより啼和工寐えくさるる徳と去とく三け



### 魁の巻

嘗て日ころさきの皮を巻つてくまを巻  
 周竹曰けりまろや何嵐を日茶まゝ子供にあまひてと  
 あまひ子依の業を移りりて一強て理舎すへうらま  
 楸園と踏破てまろへ

译曰 狐巻あるとせしむらふとまろとせしむら  
 志まろとけなまろ老胡の巻と譯して老胡の舎とゆらま  
 汝あなを尋色巻るる巻巻あ舎まは尋汝

### 頌曰

分別と巻分別と 不理屈と理屈と紙  
 除くはる花も巻を ねくまを淋くま

### や裁の译

或同や裁まはいくとまろ事よや更登日たのあむれ  
 やの字考まろへへ  
 父の母や秋いろくのみくたれ



藤と画る扇

阿さくはや扇のやねと垣根其角

是は是れはの白法なり

译曰一捧一條乃痕更登不吉辛負心事  
なるとんハヤ

頌曰

ゆふふのくれ白く 歌葉乃色きく

あさうほれ涼く歌 扇のやうのくきん

紙波の病床

う川くまは薬箱の下れきさう船 文章

云来曰翁紙波の病床人こゝ和歌の白とそく失てふより  
我死後の白く一字のお後と乞からんをこゝの吟をさく  
ゆりきんは只け一白乃こ文章出来たりと室ふかふる付いふ  
情さくううめ真と信し景と探るといふありしん  
い付くをばひありゆりぬ

译曰糸ハ文章なる一悟ら定悟を人し今日  
中春十二日肚腹裏こむろく唱と吐をさく



頌曰

春之秋よの世と枯危花 誰か不悔の園ハもぬ  
衆津ありぬ若の古塚 猶る詞乃玉と墨もぬ

盲より唾

盲より唾のウリ由子月えぬ 去來

以了後或連弁師曰花下をけるの祥あり俳諧  
かたは感情のるあまえらると諺くまうとあり去來曰  
此句ハ十七八年若の白かりも此ハ菊も若きし世も

沙汰を白くを事新しく感懐しくと云ふ句乃位と論  
ものに至るハ甚下おく多ふ蕉門の俳友中くは端々  
若くも若きを貴きら新しくすて却る今日の連弁師  
き乃りしは思ひゆるく

译曰奴ハ婢と見く慇懃く回坑埋

頌曰

東方れぬの庭をせりり 亥邊木のいそるる  
妻よほひめく秋之田作 織北山乃花紅紫に



風色朝歌

さう海と暮らうらあおとくうね 風色

田日ける人の長息なりか行を来日登るといふ  
いふれん乃に杜幸日箱の朝ふと家々飯喰ふおとくうねと  
や何なるふと秀拙ゆや来日箱の白ハ其角う整工定れ  
白と和すことるまて飽まて巧きり白吞し向のうへに  
事々一暮るふと転りり風毛う白ハ氣は表裏一の及ふ  
そのかーかいら口と寄けハ出るそのく試く作く凡せん  
歌と出さまて魯町別業とふ 病後て尻あやりもふ

本張り船着とふさく嘆て屋根のかりや山をけと十歌と  
乞て十白せんと町石とふ娘より娘も弱き石ハ糸星の  
眠とふぬき磁ふとくーの十白草紙並せは市ハ葦門進分  
才一の名あるまらけ況集も出る箱の白をれを列の本  
つてとおとみちらるー

来日け言自分御ふと似たり松も高野世間の作者  
あさ海のう或と及野辺のむけハ馬と喰まけり  
かやふ白体のみくゆるとゆふひく満まーに白紙  
吐せしとを紙流と是なるやうらりりとも来とをせん



きめは是と記しゆか

译曰德慶の事あり似きりるすハ似くきりるすハ  
是ありは元來を來誤る他のたれん許きの江脚と  
下も魯町塊と逐て階上に走る且得没交渉  
只是本文の後とてし守狗口と合取せし出

頌曰

毛にきくを誤翁 白く志くを誤翁  
相及るもを誤翁 誤るもを誤翁

切字又答

嵐	音同	翁	答切盡也
蹄	馬同	翁	答切節也
交	考同	翁	答切一旬成就也
玄	來同	翁	答切寄也
惟	然同	翁	答切四十八字各切也

译曰又同又答百同百答權實放收殺活  
擒縱會與不會都任汝等



頌曰



昨日の銭

昨日よりふの銭を飽す

評曰きふの銭をあはれんといひんを四十九年の  
非然とせん天下の是非をさるる久し九本祖翁  
一法を示さば一字を説き事ありあり

頌曰

梅を	檀林に	木を白ひけ
散る	枯枝の	鳥ふさむく
及は	みちのくふ	あくらんてん
されと	月をに	ちから茶三餅



向上一路

翁曰ふんりの姿いやはくして歎連字此下之字とて  
心向上一路とらぬ更登曰心之字ふんりの字眼

译曰能かくのやう會せ初てふん催語の連山まゝ水なき事候

頌曰

白髮三千丈 緑愁似個長

戸内しててもとけい眉のまねぢ

善妙法師の予らまそは人ごまらまぬ才のや  
みまろくくしちくまらるるの月

るわけとぬりちりき 係乃音 とせ候

涼一き夕

またらくそ寐まともく一まゆふら子 宗而

後義撰の内一右の入集と解く数句吟一其れは  
一夕翁のいさうのちさ法一象と外可んまふり一とまたらくに  
居れ涼一くゆらこり翁曰是奈句と今此の作で入集と宣ひ

译曰は話祖翁見と懐醜とまろくそ似り元來大道  
郭然として目前以新まら或曰目前座作聲生

日牛頭没馬頭回



無門

井

頌曰

極少のいりよはやくがひー  
松葉まきば又まー門

白体苦悪

嵐名曰風ハ千変易化すといふも白体ハ新怪慥正厚  
困和強解懐連がくのこまにハ一鈍濁致重薄法  
シタルキ堅強かくれぬハ一也白と云ふは  
苦無あはー

評曰能かたはこく會するもなを苦う近り来く  
痛捧と嘯まらるりらんこなきハ合屏を以  
之と眼工入る醫となす

頌曰

青柳も弱う〜ハ梅又強からす  
ほぢけらるら花の交 困を起て月も是の

意の取捨

評曰日蓋門迄とるも於るハ一に嵐名曰予はま何よ

無門

井



翁曰古ハ衣の白敷定らハ 勅使位ニ白敷と云ふと云ハ衣  
礼式の法ハ一白敷を控さハ大切の衣白敷を控ふ事ハ一白敷  
ナリ一説ハ衣ハ陰陽和合の衣ナリ一白敷を控ハ一白敷と云  
皆大切と思ふ故ニ一白敷を控ハ一白敷と云ふ事ハ一白敷  
译曰一ニ多程有りニニ支般ナリ一ニ乃是以羸得ク  
脚下の鞋を失却する事ナクハ可ク

頌曰

きく白雲の心まけきと ちり山と刃をまけけり  
夕々しの門ふまけきとハ 寐よりまよふ涙を

感時の教

嵐者曰花ノ葉一して信ならんハ花根あらんハ是ニ葉ナ  
花ノ根ハ花ノ葉ノより又葉ハ花ノ根ノより一と感時あり  
译曰嵐者月ニ指す法人却てハ什麼と云祝きり  
或人法向曰兼冷ハ袍やましく細嚀ハ氣が

頌曰

けし仇花此一和れも 袂まけあつき雪の四ふれ  
刃法ハ價千金なり 袂夜よりぬる乃下



馬の耳

馬の耳を治るべき一梨の花 文考

去来曰るの平す不先くまき一と八家もふへ一梨の花と  
よきし熟くみ妙し考曰何のかたにうらうらん吾子おこしく  
かいららり一筋のソム下さんこせかひけと誦す

译曰難とえにりして得る事と極よせん彼りこわぬ  
何の難も事うらう一遠て去来交考も若く挙一明  
三本分の事試て平胃散一貼とふん

頌曰

秘のといれあきうら 蹄すえんは牛眠  
うらまきき梨の花 赤風うけど馬の耳

附合の言

ある人附合の言と同前曰るき打と筆くうら一証を  
才不らうき太刀の反かて試ん  
樽縁に証を悉とうちくこ記  
けるとおけて右のよくと悉とうちはすたれよと



無所止

太刀と及ふの仕方——と語をききぬり

評曰 祇翁老婆親切之 法人却て恩とあるや 我今  
法人の死に再は肺を下さん 是はうき礎礎の上と  
志うも 三徳痛の妙薬とよく 諺と治し 育と治す  
人け薬と服するより 朝三暮四七又八十九廿九 佛徳  
附合とおわく 丹青と獨歩せん

頌曰

弦をかける居との遠 本はるく 寄らきて  
うき暮れ夕暮と 寸馬屋人々をいせけ

連俳のふ尔波

或人向連俳ハ初とたふふありや 初とたふふありや 更登曰

秋う歩き 為うち 教夕斗  
秋風と為 亦ち ばやふへうれ

け二夕、加賀の能順と翁と友人のふく 只け一字此ふふ  
去るは汝とゆふ 連俳とかわく 或人天の師きく 人事と  
評曰 二丈をのけ 活才と誤し 教と暮り 守連俳のたふ  
心とありや 初とありや 或曰 子試とくさうん 曰翁は

無明止

三



無門上

秦列のむらひ然ハ瀟湘のむらふ君と陳政家ハ許ワ

頌曰

一とまのたきき 煉う染れゆくからこ  
むと流乃ハなうう みるこころくたれ

摺小木の蠅

摺小木て蠅と追りころけ汁

文考曰けり蠅より葉一はくハ天下此名人なる人し  
おとらくハ摺小木のころけ汁より思ひなりたる人し

評曰玉ハ火と將く試令ハ石と將て試 劔ハ毛と將て試  
水ハ杖ハ將て試と知言なりけれ

頌曰

飯をれと運ぶて来るあり秋の蠅

鶏取菜

あけ下のとくくれとや一鶏乃也 巴静

ある人巴静けける試取して曰おしいま故人の中一文字とあやま  
たの字を用い人令危曰汝身も鶏乃と聞て眼も鶏乃を取んば

無門上

七



無印

世

ちりく一あたの字をくハ祭白くあら守交マ汝ら乃一白と徳

あまハくくこん入をたのーハ山

山の字をう用ややすうくありや

译曰汝等眼裏くろくは尺耳裡く声とくくあうはハ  
名と函ハ通年と一白と舍すへくハ耳と掩く能す  
眼は関て能く顔く上く内小着く上くあをく

頌曰

あちふれと文くまも 日のいろと目のいろ

あち花よくそこれ 彩改とさくうも

### 真草皮肉

其角曰莖門くくハ表子けと祭白の体く一皮肉骨は  
附合の体く一ゆるく

译曰試マ俳士と同くいあるハ皮肉骨いあうをまきけ  
あはと望新く家く之孔の穢滲とかく一奉れ

頌曰

冬乃日 ころみの 炭きくく

無印

世



無門

俳諧の二字

る人同俳諧の二字いふゆゑにや  
或登曰是ハ翁の骨髄なり  
こけて秘伝はるゝ但一佛成道觀見法界草木國土  
悉皆成佛ト佛證之授けよハ拒絶して見多ふ一し

評曰いへくいどくいんまんハ  
汝とオチるゆゑ道事ハ  
もやそる閑の人と  
祇揖を次

頌曰

南無くふんい

廿三

修行の地

其角曰らういふのは  
解かすまむらら  
人乃白もや  
作者は  
評曰九修か九  
ちをを竿上  
無門

無門

廿三



五の附ハ作麻生曰遠菌ハ志らくとく奈菌と知信

頌曰

馬ノ尾素をくくハ 子ノハ野不へくあ  
花ニケハ紫とあて 時と人成あくは

揚句の译

更登或附無示曰屏風の陰ニ見出る菓子盆と云白ハ  
揚句ニゆりやゆらすや

译曰是是大方の通士少ハ世下ニ兼尚せんばり人曰

子試道曰三生六十劫の位汝ニ向て再返脚と下さし

頌曰

子秋葉ハ匹ををくは 万葉集ハ余とも乃ふ  
世成おまの松乃あらり 只ふゆくと吹くおむる

下臥の榻

下臥ニけりこかろやいとけくら  
翁落とて譯て曰げし其角々集ニはるけりいふおりひ  
入集一先去来曰系係の十分ニ候ふ形容よくいひおせ







信後平話

初日ふかいと信後平話と云ふ人々高きりと史官曰  
の字直流の字眼なり

評曰希と云はれありほと史官なり諺て今日泰堂れ  
大衆と告きたる人佛造のよとあてぬと云と説も  
よくいふと徹座せし人祖翁の弟なりと熱識九以  
春の日ゆり

頌曰

遠くよはわり 及も今あり

松とは松

若くは若れつとやひい松 蘇太

或人誰曰凡奔白くのかく他と求るものより大抵  
此伏せよとせむらふとぬるなり 後馬曰他をば  
奔るとあらば汝も作らしてぬるらるは法試とつら  
奉せむ視ん或人を説

評曰後馬も亦賊馬と云て賊と遊幸と解するもの  
志るはとてその意を後馬賊なりと云



頌曰

あはれ秋乃月と暮さそ照く  
言は月と暮さそ見く

素秋の端

或向素秋のふ俳諧深秘のいしうしう事と暮冬太日  
汝素秋の事と暮しん之歎りや脚上俳諧の空地と端口に  
俳諧の自在とけく文之眼と関るる三年白と白紙と事  
知て始と知へし暮さそをいしう將暮本とけく芭蕉と同

译曰汝後人群とけく隊と從し如雲といゆり藤  
た〜飲く然りて俳諧後〜妙と流、試又一事と  
筆をいハ口喃く知得るる底ハ出たれ急志習ひ人  
三十年の位象骨と換て出まると待却て汝に向く  
道今日我東行ゆりと妨事なれ便下中

頌曰

虫乃暮もかきく〜暮れ下葉をさす  
いはくと秋のゆく〜月〜花をさす



俳諧三鳥

或人更登之和歌三鳥の傳をと登曰かへりけりくも  
 三鳥ハ古今傳受りて下はゆのとの嘗くもなるさ  
 本より守まて我俳諧の三鳥なり傳源録一巻あり  
 ぢまけも名目して志くする人もあやめんゆりて本年此  
 執心よりてそまとも人曰志る鳥より非みそりか

译曰昔華山舎よりむかへ迦葉破類微矣といへ  
 釈より曰我の正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙  
 法門教外別傳不立文字より摩訶迦葉又附屬す

よりしり西天の四七東土の二二江南江北の七宗とありて  
 棒と掉唱と行一衆と匪徒と傾きりも正法眼藏と  
 滅却せん事以忍くこまへ更登此くお傳のふりこれ  
 正法眼藏とは悉く一他家の児孫とむと下下兼由  
 せん事とおふも実こそ老後安親切く若人は俳諧の三鳥以  
 極んごちりては二百六十の骨節八萬四千の毛竅をひきり  
 通心く箇の類とおくして眞衣と提撕して大若悩と  
 更る人のやくけ熱鐵丸と吞うて吐事もおほも吞うも  
 吞ゆす忽爾膈熱同一陳せん唾子の愛のこめりり



無門

卅八

夫とく行とくく初ては正法眼觀と自知也或曰交登  
之をれ目以わけて三多の意と傳へたりといふ曰汝もらばや  
印り入との家跡とあらすは一言の傳ふへ言はるも是  
まをあらて蛇とむらりをり甚の交渉たりん曰子も  
之了の工交様とわらふ事なり曰様と今も其の御と  
今も御と今も其の禪と今も汝は麻徑成す事なり

頌曰

貫旨自得妙

直哉其

直哉

直哉

四十一



